

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第13号／1989年（平成元年）6月25日発行（年3回発行）

発行所＝社会福祉法人 嬉泉・世田谷区船橋1-30-9（〒156）

TEL 03-426-2323

発行人＝石井哲夫 編集人＝友田篤

人を信頼する

松島 正儀

福祉界における作用は、すべて人が、人を信頼するところから始まり、これが基本となつて関係が発展できれば大変にいい。人が人を信頼できなければ、発展はむずかしいし、関係は不成立となりやすい。

施設生活の中では、子どもは指導員や保母さんたちを信じて、たよりにし、だいすき、という感じで慕われれば素敵である。職員の一人一人は、子どもの一人一人を信じてあげの中で、他面、友だちとなつて遊び、そして展開できれば素晴らしい。

ここには愛情もいるし、知識も新鮮でありたいし、対話のひとつ言、差し出す手にも技術が生かされるといい。施設の生活だけでなく地域と取組む場合でも、対象となる方々と、ワーカーとの関係は、個人的な対人関係とは異なつて、専門職的な人間関係で結ばれるといいし、幸いである。即ち子ども達とともに自分も充実する方向の人間となつて伸びるからである。

先般、埼玉県、千葉県、東京都の田園調布では、幼児誘拐事件がつづいておきた。事件現場に近い主婦たちは「だれをみても、他人は信用するな」と子ども達に教えこむのは、つらいと言いながら、学校の先生方と一緒に努力した。テレビ、新聞でも報道を重ねられて首都圏の近接地域一帯の幼稚園、小学校では警察のすすめもあり、同じような意味を子ども達に伝えた。

「だれも信用するな」と大人たちが、子ど

も達に教えることは、人格形成上重大な問題である。

創造的な人格が育つてほしいと思うのに、破壊された人間になってしまうからである。

次に、人間社会と信頼という関係で「うそで固めた社会」の感がある、昨今の状況は、誠に残念である。政治家は「うそつき」で信用ができない、財物疑惑にからむ人々は勿論であるが、役人のえらい人達も平気でうそをついているのではないか。これは最近における中学生作文応募による指摘事項である。私はこの視点はとても大切に、案じている。子どもの人間形成、清純な心の発達にマイナスが残るからである。今年四月文部省の新教育要領は倫理を基軸に発足しているが、出来ごとは逆になっている。

本年お正月、総理大臣はNHKを通じ全国民に挨拶され、特に倫理を強調されていた。然も誓いの言葉を重ねられたのが印象的であった。翌日経団連の会長さんも、倫理を重んずる旨の発言をされていた。

生きて仕事をするには、金もいるし物もいる。しかし、人が、金や物に支配されないよう、私たちの福祉界では、別の意味で人間重視、人と人の信頼関係を基軸にすてきな倫理綱領ができていく。日本ソーシャルワーカー協会による作である。

人の信頼を大切にす私たちがでありたい。

（社会福祉法人東京育成園理事長）

施設経営と言う言葉で、すぐに「金」を連想する人が多い。そして「金」が無ければ何も出来ないとか、何が「金もうけ」のための方法が無いかと思うらしい。と言っているのは、かつてある書物に民間社会福祉施設長への調査結果が報告されていて、その大半の人たちが「自主的な新規事業をおこなうための経費の確保に見通しが持てない」ということであつた。つまり措置費外の収入を得て、何か必要な社会福祉事業を興すという可能性に乏しいということである。すると、これからの措置費制度を改革していこうという民間社会福祉事業の構想はどのような働きになっていくものであろうか。

実はこの三月末に出された中央社会福祉審議会、中央障害福祉審議会及び中央児童福祉審議会の三審議会合同委員会の提言において示められた如く、民間社会福祉法人の経営努力を求める声も、具体的な事例を提示することなしに経っている様な状況なのである。私見ではあるが、私は我国の社会福祉法人を利用者の集う一企業として、その経営性の追求に出来る限りの保護を与えるべきであると考えている。

このことは、一種の財政措置を伴わない社会福祉事業を拡大する

ための奨励であり、自己財源を確立し、余力をもって社会福祉ニーズに対応することであろう。

例えば保育所のような小規模の社会福祉施設が独立で、その地域社会に奉仕することは出来ないが、他の社会福祉法人と組んで、その地域の人達に対して何らかの収益を求める企業的な仕事を行うことが出来るとすれば人件費の確保も困難なことではないし、そしてその人によって、地域の行政が求める地域福祉のサービスを少しでも行うことが出来るように考えることも出来るものであろう。

施設経営の創造性 (その四)

石井哲夫

聞くところによると、大社会福祉法人の中には、有限会社という形式によって収益事業を行っているということもあるという、恐らく、その収益は社会福祉事業の経営に役立たせていることであろう。

さらに社会福祉法人自体が一般企業と手を組んで、シルバ産業や福祉機器の開発や普及に協力しているところもあるという。社会福祉の専門性によって福祉産業の方向が誤らないように気を配ることも意義あることであろう。

我が社会福祉法人嬉泉は、発足当初は、法外事業である家庭児童相談事業を行っていた。この時にはほとんど公費による援助が無く、利用者から実費を徴収していた。この頃よく一人分の人件費を稼ぐためにはどのくらい働いてもらわなければならないかを考えたものであった。結論としては、我國の相談事業は、全く民間で成立させるには、莫大の報酬が必要で、弁護士や健康保険によらない医療費を考えればわかることであつた。

従って相談料の他に指導料、し

かも出来るだけ集団を活用した指導を行って、恒常的な収益を求めらることに依らなければならなかつた。それでも一年間の収支を過不足なく抑えるためには、一人の職員がかなり密度の高い労働をしなければならず、そこには何人かの同志的な結合が必要なのである。つまり多くの職員の中には、仕事にかかる経営条件のわからない者もいて、仕事に対する責任を果たせないような状況をみせるものも少なくない。もしこのような事態を放っておくと共倒れになる恐れ

があるので、責任をもつ側では一致協力して、その尻ぬぐいにつとめなければならぬのである。かくして今の主任会による組織が出来上がり、出来るだけ多くの人にこの仕事の経営性を理解してもらおうように考えていったのである。

考えてみると公費が導入されるから、(措置費による法内事業が開始されてから、)法外事業がなくなり、経営も安定されてきた。これは経営の責任をもつ者としては、大変気持ちが楽になるということである。反面活力が失われてきたことも感じられたことである。たとえば、今何か新しいことを考えて実践しようとするれば、まず職員の気持ちを確かめ、その労働条件を悪化させぬよう気をつけなければならない。

これではどうしようもないことが多くなる。そこで考えるのは、今、政策として一応経営が安定している社会福祉法人に経営の不安定な法外事業を行わせようということが、具体的にどのようになつていくのかということである。

私の法人と逆のことを求めることになるのであろう。とすれば、まず中心になる職員の同志的結束から始めることを心がけるべきではなからうか。

ひかりのタイムス

独立第7号

平成元年になり、「ひかりのタイムス」の編集方針を改めます。学園の利用者達の生の文章や作品を載せたい、と思います。つたないと思いますが、暖かく読んでください。

石井先生からこのような御要望がありました。

「今のひかりのタイムスは、嬉泉新聞と変わらない。職員の記事ばかりでつまらない。内容は、つたなくていい。利用者達の作品や、文章（注・書ける人）を載せて欲しい。」

読者の要望は天の声、それを聞くのが、編集長の使命。

そこで各グループの先生に、依頼する事になりました。文章の書けるYちゃんやUさんに頼みました。原稿も苦心の末ままとりました。御協力くださった皆様に感謝しています。

つたない文章ですけど暖かい目で読んでください。神様のおかげで、原稿もうまくままとりました。（編集長・山岸）

レインマンを見て思う

山岸 裕

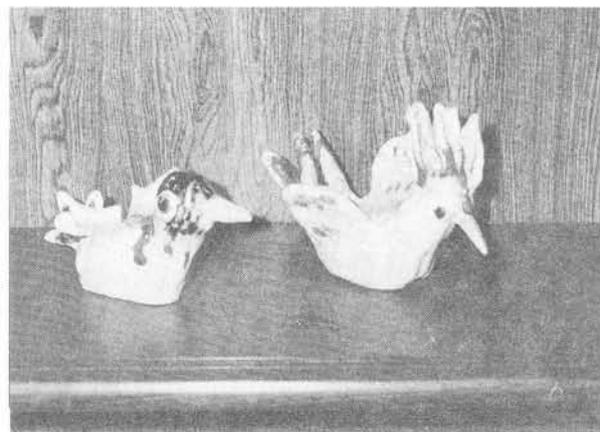
春休みの一日、レインマンを見ました。

人気スタアのトム・クルーズ・ダスティン・ホフマンの二大スタアの共演で、きょうびのヤングが目白押し行列で混んでいました。彼等に複雑な障害自閉症が理解出来たでしょうか？

ストーリーは読者の方々には存じの人もいるので省略します。

アメリカで、自閉症の権威エリック・ショプラー氏の監修によるもので、自閉症を故意に歪めたりする事はないです。正しい自閉症の理解につながるように、パニック・一つの事に対するこだわり・性への関心（これはサラリと触れてた。）かんしゃく起こすところ・記憶力のいいところ・おうむがえし……など自閉症の症状

をありのままに映像でとりあげた。



観衆はこの手の自閉症の症状が映像に映し出される度にゲラゲラと笑った。人々の受け止め方なんてこんなもんか……

日本だったら浪花節的に、障害を持つ親の献身ドラマとして描かれやすい。しかしアメリカ映画はドライで、サラリとしていて乾いている。

主人公の弟が最初はこの自閉症の兄を嫌いだっただのが、正面から

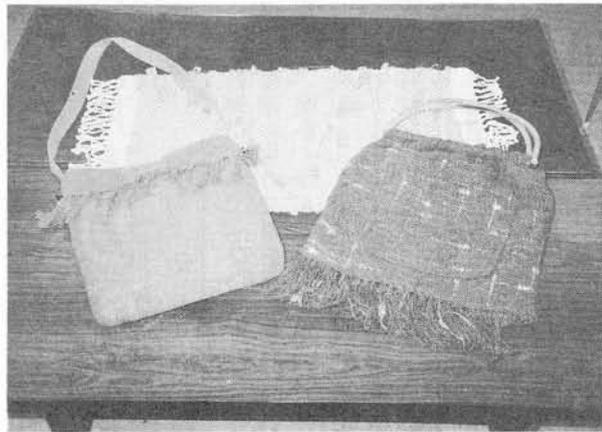
秋山住江さんの作品

ぶつかっているうちに、人間として接するようになる。日本じゃ絶対考えられないのは、記憶力のいい長所を利用して、ラスベガスのカジノで主人公の弟がひと儲けをたくらもうとするシーン、われらの国じゃこういう形の社会参加は誰も考えない。それと主人公の弟が、恋人とセックスしている時、何の音かと、びっくりした主人公がベッドに来るシーン、日本だったらタブーとして処理されてただろう。

主人公の役に見事になりきっていたダスティン・ホフマンの熱意が画面から感じられた。

われらの国じゃこういう映画は、作れない。アジアの成金と、映画文化の伝統がある国とは、根本的に格差がある。アメリカさんが、われらの国の商習慣に文句をいうが仕方がない。

しかし、世間の見方は、自閉症特有の記憶力のいいところとか、そういう能力を美化しがちで、われらの短所。社会で生きにくい状況には無関心であり続ける。



高橋一海君と二木俊也君の作品

『私の全て』

秋山 良江

ある日、私は本屋さんで「世界の物語」という本を見つけた。その中の「七人の小人の家」という話を見た。

その挿絵が麻美理乃さんで、七

次回作はその辺にもふれて欲しい、と私は思う。
映像ほど活字メディアより影響力のうるものはない。
(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

人の小人が、光GENJIになっていた。だが、それは小人といっても、妖精なのである。
それから、私はうちの家族が嫌がりそうなマンガ本が欲しいのである。

だが、私の好きな物をもってみると、子供向けの本や、マンガが好きなのである。

私は家にならなくて、友達(といっても生きていない)は居る。

最近、私は子供向けの本に凝っている。欲しい本は「小公子セディ」と家の人の嫌いなマンガの本と「ロボットカミー」とその他面白いマンガの本である。

(袖ヶ浦のびろ学園児)

『お願い』

宇佐美衣子

山口先生 齋藤先生 阿部信太郎へ

道志村合宿へ行くので
ハンカチ ちりがみ バス
タオル タオル バス
キャップ パジャマ ブラ
ウス スカート 靴下 パ
ンツ ブラジャー 下着
石鹸 ヘアブラシ ハブラ
シ 歯磨き パラソル ペン

シル ペロジューパイナップル
キャンデー ペロジュー林檎キャンデー ミオジュリーC チュッパチ ャップス メロディーポップスガム キャンデーを持たせて下さい。
(袖ヶ浦のびろ学園児)

『横浜博見聞記』

山岸 裕

G・Wのある日、横浜博に行ってきた。

混雑してるかと思っていたら人気がパピオンは一時間以上の行列だったのはうんざり。しかし、あまり人通りのある所はすいていた。

筑波万博やデイズニールランド等で、パピオンでやる出し物は説明のあと映像ショーというワンパターンには、食傷気味になる。パピオンが、謳い上げる人類の進歩と発展も科学技術の矛盾と問題点の続出で色褪せた(原発事故・フロンガスの大気への放出によるオゾン層破壊等)

それにしてもこのイベントに総力をあげて取り組んだ横浜市の熱意努力には感銘を受けた。みなとみらい二一計画に力をそそいで、千葉の幕張メッセとともに、東京

湾開発時代の主役に、なってほしい。福祉・環境といった他の懸案事項は二の次にしてまで、横浜博を開いた意義はある。

市制一〇〇周年の節目にこのようなイベントをやる事により未来への新たな展望は開ける。横浜・千葉といった首都圏でNO・二の都市の発展の為に、福祉・社会保障政策の抑制はやむおえない。又、そのようなゆとりは自治体の側にはありません。

それなのに障害児・者団体はやたらに、施設を作って下さいと、自治体のおかれている状況を無視して自分達の都合で陳情しがちである。

話が脱線した。本題に戻ろう。パピオンでは、文字放送をやった。このようなニューメディアも、今いち普及していないのは残念である。

文字をみながら情報を知るというメディアはTV世代にはなじみやすい。

横浜博、それは企業・自治体のPRの場としては、最適である。企業イメージ、自治体イメージがよくなる。それまで企業に対して抱いていたうさん臭いイメージがなくなる。

私たちの

うらやま

須藤福祉センター各事業所からの報告

のびろ学園の治療指導部について

小野 澄江

袖ヶ浦のびろ学園に治療指導部があります。そこで接する子どもたちは、集団生活に入る事がむずかしいと思われるか、唯ひとりで自分の好きな事だけにこだわってしまうとか、特に人と関わるといふ事に対しては、職員を信用出来ないか警戒している子どもたち、又、新しく入園して来て、未だ此の学園に馴染んでいない子どもたちが対象となっています。対象者を決めるのは、園長と相談の上で決める様にしてあります。

指導室は、外部からの刺激をあまり受けない場所として、別室を頂いております。此の室内では、通常、二人か三人を一緒に呼ぶようにしておりますが、その目的は、先ず小集団に馴れる事を考えましたが、その小集団の中でも、

尚刺激される子どもは、その状態の落ち着いていっている時に、個別で対応出来る様に考えておられます。

個別指導では、その子どもが自由出来る様に配慮しておく事が必要なのです。

子どもが自分から行動し、こちらにも、何が好きなのか、又は嫌いなのかを教えてください。お子さんもおりますが、なかなか心の窓を開けてくれない子どももいます。そうした子どもには、時間をかけて、ゆっくり対応し、子どもの興味をひきこような、玩具を特別に用意する事もあるのです。その様な状況を設定する事で、安定した時間を過ごす事も出来る様に思えます。

子ども達が行動で示す事が出来るようになりまして、それを大切に育てて多少なりとも交流の出来る日課を過ごせる様に、常にお子さんの気持ちになって働きかけをする事が最も基本的なセラピー

だと考えております。

又、毎週土曜日に外来の御相談を受けております。相談ケースは五ケースありますが、施設機能の地域への開放と地域との交流といった面からも、とても大切な仕事のひとつと痛感しております。現在、二人の職員が担当しております、私は親御さんとセッションを受け持っております。

治療指導面では、常に石井所長よりセッションを受けておりまして、山根園長とは、すべて相談の上、子ども達に対する処遇を考える様にしております。

治療指導教育という言葉は、よく聞かれると思いますが、世間で



は〇〇療法とか〇〇式教育とか云われる事にはこだわらず、私としては、障害児者のためになる様に、又障害児が、よりよく生活が出来るように、さらには、普通一般社会に少しづつでも踏出せるよう願って止みません。

強いて専門的に云わせて頂くならば分析の関与観察は、臨床的対応であり、石井所長の云われる受容的交流療法の原点と一致するものと確信しております。

(袖ヶ浦のびろ学園治療指導部主任)

(四ページより)

がこの五日間にわたり、必ず何らかの役割を分担しながら、衣食住を整えるところから研修とします。

今年、新人職員の紹介に始まって、全事業所の全てのグループの主任に対して一年のまとめの発表が求められました。

そして、皆が不安と期待と恐れおののく年度当初恒例の人事発表があり、グループごとの新年度に向っての打合せが始まりです。この間にレクあり、作業あり、そして石井所長の講話があった、皆の胸の内に新年度への様々な思いが膨らんでくるのです。

(友田)

嬉泉の出来事

厚生省浅野課長

袖ヶ浦に来園

厚生省児童家庭局障害福祉課長の浅野史郎氏が、去る四月一日、袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園に来園しました。厚生省の課長が施設を訪問見学するということは、希なこと、施設も法人も事の重大さに緊張しつつ課長を迎えました。すなわち、課長の発想や決断は、全国の社会福祉的状况へ直接に影響を与えると思うからです。

今回の浅野課長の袖ヶ浦訪問の背景としては、次のことがあるということです。それは、在宅障害者の重度化傾向がますます進行し、家庭では手に負えなくなってきたり、社会福祉施設も対応しきれないでいるということです。浅野課長はこの問題に「強度行動障害」の呼称を与え、その処遇を研究し、施設処遇を促進しようと考えていて、受入側の施設を自ら調

べ、自らその意見を聞くとうとして
いるのです。

学園に到着すると、課長は精力的に園内を見学して回り、作業指導や生活指導の説明を受け、先程の考えを私達に話してくれました。その考えはすぐにも望ましい方向に実現するものではないかも知れませんが、私達は全力をあげてこの課長の政策に応援をしたいと思います。(森本)

東京都福祉局の見学

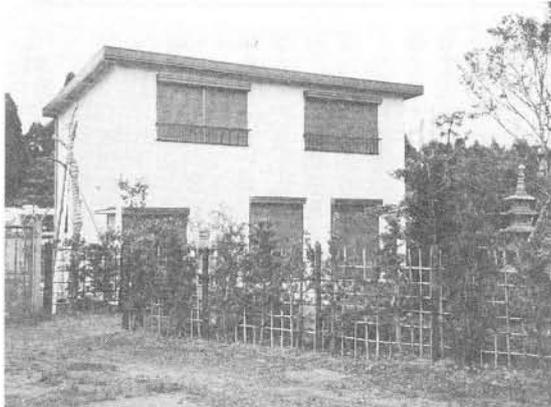
ついで、五月二日には、東京都福祉局精神薄弱者福祉課の三名及び総務部企画室三名による、袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園の訪問見学が実施されました。福祉局の方々は、つぶさに両学園内を見学して回り、安定して生活し、意欲的に作業に参加している学園の人々の様子を見て、高い評価を与えてくれました。精神薄弱者福祉課の川村氏より、数日後に見学の礼状をいただき、その中にも学園

の処遇を再び評価していただき、職員一同心から喜びを覚えた次第です。(森本)

親子交流棟

三月末、財団法人三菱財団の助成を得た「親子交流棟」が竣工しました。(写真)

自閉症児は施設を退所後、精薄者施設に入所するか、家庭に戻り地域で生活することになります。このため、在所中に専門性の高い療育処遇により自閉症特有の問題を軽減し、発達を促進します。また、退所後に不可欠な家庭



の養護能力と理解を高めることも在所中に同時に為さなければなりません。このため、学園では、家庭宅を積極的に行っています。家庭の事情などにより帰宅ができないケースが増えてきました。これらのケースに対処するために、親が施設に滞在し、自閉症児と交流することにより養護能力と理解を高める、このために「親子交流棟」が活用されます。

(小野直人)

年度初めの新人研修

今年も去る四月一日〜五日の四泊五日、毎年恒例となっている「新人研修」が袖ヶ浦の学園を中心に実施されました。研修は、慣例上「新人研修」と呼んではいるのですが、実質は新人を主体とした嬉泉の全事業所の全ての職員が参加する「職員研修」です。従って、これには、園長職はもちろんのこと現場の保母・指導員ばかりではなく、看護婦、雇用員から事務職員まで、文字通りに全ての職員が参加するのです。今年には新人一四名を含め総数は一一〇名にもなりました。

この研修の特色は、全ての職員
(三ページへ)